

「セノタフ」考

～戦争記念碑と無名戦士の墓から見た集合的記憶形成の諸問題

波 田 永 実

はじめに

ウェストミンスター・ブリッジのたもとにロンドンの観光名所の一つビッグベンがある（正確にはビッグベンは時計塔の鐘の名前で、時計塔や時計そのものの名前ではない。）。それに続く建物はハウス・オブ・パラメント（イギリス議会、正しくはウェストミンスター宮殿）である。向かってその右手奥にウェストミンスター・アビーがある。両方の建物のすぐ前にパラメント・スクウェアがあり、多くの政治家の銅像の中にはウィンストン・チャーチルのリアルな像などを見ることができる。そこからトラファルガー広場の方を見ると、やや左にカーブしたその大通りはホワイトホールと呼ばれ、ウェストミンスター寄りの一番手前に長方形の背の高い白い石の記念碑がある。それが連合王国（UK）とコモンウェルス（イギリス連邦）の戦没者追悼記念碑＝セノタフ（Cenotaph）である。

セノタフが建っているホワイトホール一帯は首相官邸、外務省、国防省など政府主要機関が林立する、日本で言えばさしずめ霞ヶ関か永田町一帯というところであろうか。通りの突き当たりであるトラファルガー広場にはネルソン記念柱がそびえ、そこに至るまでのホワイトホールの道路の中



セノタフ。以下の写真はすべて筆者が撮影。

中央分離帯や道路脇にはイギリスを代表する軍人たちの騎馬像や立像が建ち並んでいて、まさに「大英帝国のビクトリーロード」といってよい景観である。その中にセノタフもある。2005年7月、セノタフの後方に黒い記念碑が新設された。それは第二次世界大戦で戦没した女性たちを記念したもので、白いセノタフと対照をなしている。

そもそもセノタフの語源はギリシャ語で「遺体の入っていない空の墓」という意味である。ホワイトホールにある現在のものは、1920年11月11日の休戦記念日に国王ジョージ五世によって除幕された帝国全体の第一次世界大戦の戦没者追悼記念碑として建立された。以降、イギリスでは11月11日に最も近い日曜日が戦没者追悼記念日（Remembrance Sunday）とされている。毎年イギリスではこの日が近づくと胸に赤いポピーの造花を刺した人々が増える。この日にはエリザベス女王をはじめ政府要人や軍関係者、遺族などがセノタフに造花でできた赤いポピーの花の花輪を捧げる。



セノタフの後方にある第二次大戦で亡くなった女性のための記念碑

赤いポピーは「追悼」を意味し、第一次世界大戦の激戦地であったフランドル地方では戦場に咲き乱れていたという（自生のポピーの種は掘り返されたり踏まれたりすると成長がいいらしい。戦場はまさにその条件を備えていた。）。前述のように、このセノタフは第一次世界大戦における連合王国と植民地、自治領の戦死者を追悼するために1920年に建立されたが、その後、それ以降の戦争の死者もセノタフで追悼、記念されることになった。

本稿は、セノタフ＝戦没者追悼記念碑を中心にパンテオン（フランス・パリ）、ワルハラ（ドイツ・レーゲンスブルグ）、エトワール凱旋門（フランス・パリ）、ノイエ・ヴァッヒェ（ドイツ・ベルリン）など記念碑（記念堂）の持つ意味を考察し、そしてそれとの対比で「無名戦士の墓」について考察することを課題とする。その理由は、第一に、ある集合的記憶、あるいは国民意識の形成に、ある種のモニュメントが大きな役割をはたしているからである。本稿はこの意味から戦争記念碑と無名戦士の墓に焦点を

当てつつ、それがなぜ創られなければならなかったのか、それはどの様な役割を期待され、機能を果たしてきたのかを検討する。このことによって、国民国家における集合的記憶の形成のメカニズムの一端を明らかにしたい。

第二の理由は、小泉内閣の成立以来、再び首相の靖国参拝が国際問題となり、当時の福田官房長官の私的検討機関として「追悼・平和祈念のための記念碑施設等の在り方を考える懇談会」が設置され、そこで各国の「無名戦士の墓」や戦没者追悼記念碑についての比較検討等がなされた。そしてその討議内容や資料等⁽¹⁾もweb上で公開され、改めてこの問題に関心が集まった。靖国問題の「現実的解決」の手段として、国会議員の中にも自分のHPなどでこの問題に言及する者も増えてきた。そして、あたかも「国民がわだかまりなく追悼・祈念できる『無宗教』の施設が必要である」という主張の正当性の論拠であるかのように各国の「無名戦士の墓」やセノタフが「参照」されている。このことに強い違和感を覚えるからである。この問題は本稿で詳しく述べるように、もう少し歴史的文脈をふまえて慎重に議論されるべきであると考ええる。

筆者は2007年4月から1年間の在外研究をロンドン大学の歴史研究所(Institute of Historical Research)で過ごす機会を得た。そこでセノタフに関する資料に接し、そして実際にセノタフをはじめとした戦争記念碑を見て、「無名戦士の墓」を見て、考えたことを以下で述べてみたい。

第一章 セノタフとは

「空の墓」と「遺体の入った墓」

そこで、ここで改めてセノタフとは何かを検討してみたい。言葉の意味は前述の通り「遺体の入っていない空の墓」である。ここで考えたいのは「空の墓」の持つ意味についてである。

その第一には、「空の墓」があるからには別に「遺体の入った墓」(=本

当の墓)がある,ということが重要である。イギリスにおいてはウェストミンスター・アビーにある「無名戦士の墓」がそれである。その意味するところは,第一次世界大戦の戦場跡につくられた100万以上の帝国の全戦没兵士の戦争墓を代表し,象徴するものとしての墓である。



ウェストミンスター・アビー内の無名戦士の墓

周知のように,第一次世界大戦は戦勝国イギリスにも膨大な人的被害をもたらした。ここでイギリスというのは正確ではない。カナダ,オーストラリア,ニュージーランド,インド,南アフリカ,ニューファウンドランドなどがイギリス=連合王国とともに参戦した。これらの国々(当時の自治領や植民地等)で構成される帝国全体で100万人を超える戦死者は空前の数であった。戦争中から参戦国のそれぞれで戦没兵士の墓と彼らのための記念碑の建立が問題にされてきた。イギリス(連合王国)と自治領各国などで構成される帝国会議は1917年に帝国戦争墓委員会(Imperial War Graves Commission)を創設してこの問題に対処しようとした。(この点

に関して筆者は別稿を用意しているので、ここではこれ以上ふれない。)。

「無名戦士の墓」設置のいきさつについては「『フランスに眠る名も無き英雄の亡骸をセノタフの下に埋葬すべきではないか』との新聞社説を契機」⁽²⁾としていたが、実際には無名戦士はセノタフの下ではなくウェストミンスター・アビーに埋葬されたものである。セノタフの下に埋葬されていれば、後述するようにフランス・パリのエトワール凱旋門に似た性格の記念碑になっていたはずである。なぜ、セノタフではなく、ウェストミンスター・アビーに葬られたのかについては、それを求める運動が起こされ、当初消極的であった戦争省・政府を動かしたという事情があったからだが、その詳しい経過については他日を期したい。

ともあれ、激戦地であったイーブルやソンムの戦場跡から身元不明の兵士の遺体が六体掘り出され、その中から選ばれた一体が、ドーバー海峡を渡ってロンドンに運ばれ、1920年11月11日、ウェストミンスター・アビーに埋葬されたのである。この点についてG. モッセは『英霊』において次のように述べている⁽³⁾。「(遺体を) 選んだのは、負傷した下士官ではなく、階級の高い将校であった。無名戦士はフランスの駆逐艦ヴェルダン号に乗って、英仏海峡を渡った。儀式全体の中にこの戦いの名を含めるためであった。棺は(歴史的連想を多く喚起する王宮) パンプトン・コートにあるブリティッシュ・オークの木で造られた。塹壕用兜とカーキのベルトとともに、十字軍兵士の剣が棺に納められた。無名戦士が英国版パンテオンたるウェストミンスター寺院に埋葬されたのは、フランスの無名戦士が凱旋門に運ばれたのと同じ日であった。」

この儀式が行われた1920年11月11日は、第一次世界大戦が終わって2回目の休戦記念日であった。これが「遺体の入った墓」=「無名戦士の墓」である。これに対応するのが「空の墓」=セノタフということになる。

第二に考えなければならないことは、「遺体の入った墓」=本当の墓が造られたのになぜ、もう一つ「空の墓」が必要なのだろう、という点であ

る。実はこれが本稿のテーマでもある。

セノタフと同じ「空の墓」はホワイトホールにある記念碑だけを指すのではない。「空の墓」は古代のエジプトにも、インドにも、イスラム圏にも存在している。現在ではそれらも一般名詞でセノタフと呼ばれている。ではそのセノタフとは何か？ 何のために造られたのか？

一言で言えばそれは「礼拝用の墓」である（古代では盗掘を避けるための「偽の墓」という効用も考えられる。）。普通、「礼拝用の墓」を伴うような墓の主は支配者か宗教指導者であろう。「遺体の入った墓」は多くの場合「安息」のために廟の地下に安置され、廟の地上部分にあるセノタフが日常の礼拝用として機能するのである。ちなみに、フランスではナポレオンの戦勝記念碑として建てられたエトワール凱旋門に「無名戦士の墓」が設置されている。記念碑と墓が同じ場所にあるわけだ。

筆者は「高い台の上に載った棺」という意匠のホワイトホールのセノタフも礼拝用、あるいは儀礼用の墓であると考えている。このことはセノタフの除幕式を考察すれば明白となる。

セノタフの除幕式の考察

実は先ほどのモッセの引用文には次のような一節がすぐ後に続く⁽⁴⁾。「そしてホワイトホール [トラファルガー広場から議事堂に至る通りで、ロンドンの官庁街-ママ] の真ん中、広い並木道に設置された戦没者記念碑の除幕式が行われた。」

つまり、ウェストミンスター・アビーに造られた「無名戦士の墓」に棺を納める儀式=葬儀の途中でセノタフの除幕式は行われた。この葬儀にはイギリス最高の軍事勲章であるビクトリア十字勲章受賞者全員が騎上兵となりウェストミンスター・アビーの外側を護衛していた。この勲章は敵前において勇気を示した軍人に対してのみ授与されるので、司令官や参謀が受章することはない勲章であり、その受章者の参加はこの葬儀に重要な意

義を与えていた。トラファルガー広場方向から進んできた行列は、セノタフで止まり、そこで国王ジョージ五世による除幕式がとりおこなわれた。国王をはじめ行列はそこから棺をのせた砲車のあとを徒歩でウェストミンスター・アビーに向かった。砲車の両側にはイギリス本土にいるすべての将軍と提督が付き従い、見物のロンドン市民はすべて脱帽して棺を見送った。もちろんこの一連の儀式には軍関係者だけでなく政府要人も上下両院議員もすべて参加している。

これがセノタフの除幕式の顛末である。この日の儀式の最終目的が「無名戦士の墓」への埋葬=葬儀であり、その途中でセノタフの除幕式が行われたことを改めて確認しておきたい。つまり「本当の墓」と礼拝用の「空の墓」である。セノタフはこうして毎年11月11日に一番近い日曜日に戦没者追悼記念の国家行事が行われる記念碑となったのである。

トラファルガー海戦で戦死したホレイショ・ネルソンの葬儀の時、国王ジョージ三世は臣下の葬儀に国王が出席することはないとして王宮から葬列を見送ることにとどめたし、彼の息子たちが王族の資格で葬儀に参列することも許さなかった⁽⁵⁾。それと比較すると、戦没者追悼祈念碑を国王自身が除幕し、さらにたとえ短い距離であったとしても自身で歩いて無名戦士の葬儀に参加したという事実は、それ自体が第一次世界大戦の歴史的な意味を象徴しているといつてよい。

ウェストミンスター・アビーには歴代国王をはじめ著名な政治家、文化人などの墓が多数存在し、すでに「満杯」状態であったが、「無名戦士の墓」はヴィクトリア・ストリート側の出入り口、つまり現在の見学コースの出口の手前に作られた。しかし、教会内部はすでにたくさんの墓や記念碑で満たされており、中はいつも参拝者、見学者で満員電車並の混みようである。したがって、そこに戦没者追悼記念日に何万・何十万という人が礼拝に訪れることは、事実上不可能である。その点、セノタフは政府所在地の大通りの中央に設置されており、多くの人々が行き交う途中に礼拝す

るのに適している。墓が最終的に封印された1週間後までには100万人が訪れたという。

モッセはセノタフが建立された理由について次のように述べている⁽⁶⁾。「1919年7月の平和祝典の際に、敬礼する対象が必要になってはじめて提案された。つまるところ、英国には凱旋門がなかったからである。だが、戦没者記念碑の建造には、政治的な理由もあった。国は不穏に沸き返り、政府はボルシェヴィズムが英国に足がかりを得ることを恐れていた。愛国感情を煽るために勝利を利用できるなら、何でも利用しなければならぬと信じられた。戦没者記念碑はその解答となった。いわば、戦没者と勝利とを象徴する棺台であった。」

興味深い指摘であるが、これにはいくつか留保が必要である。まず、イギリスに凱旋門がないという指摘は正しくない。現在ハイドパーク・コーナーにあるウェリントン・アーチは明らかに凱旋門である。これは国王ジョージ四世がバッキンガム宮殿のために製作依頼したもので一八三〇年に竣工し、現在位置に移されたのが一八八二年で、式典の行われた一九一九年、一九二〇年より前である。しかもウェリントン公はワーテルローの戦いでナポレオンを破った、イギリスにとっては海のネルソン提督と並ぶ陸の「英雄」である。現在ウェリントン・アーチのまわりには第一次世界大戦の記念碑などが多数存在している。したがって、ウェリントン・アーチを中心に戦没者追悼記念碑が計画されてもそれほどおかしくはない。しかし、実際にはそうはならなかった。その理由は結果論的に推論するしかない。つまり、それはホワイトホールのような政治の中心部にあるわけでも、エトワール凱旋門のように際立って巨大でもない。そのため記念碑としての「象徴性」が相対的に低いことは否めなかった、と考えられる。

次に現在のセノタフは1919年の式典の時に作られたオリジナルではなく、そのレプリカである。次にこの点を検討してみよう。

オリジナルのセノタフとレプリカのセノタフ～1919年と20年の式典の考察

まず、1919年の式典の時に作られたオリジナルのセノタフは木と漆喰で作られた一時的なもので、それを忠実にコピーして1920年にイギリス特産のポートランド石で恒久的な記念碑として作られたものが現在のセノタフである。それをデザインしたのはエドワード・ルトウィンズ卿である。先にもふれたように、1919年7月19日に戦勝記念パレードが計画された。Geoff Dyerの“THE MISSING OF THE SOMME”によれば、「時の首相ロイド・ジョージは『死者に対する何らかの賛辞』を含まない国家的な祝賀のどんな提案にも反対であった。ルトウィンズは正式に一時的な非宗派的な「棺台」という意匠についてたずねられた。数時間の中に彼はセノタフになるもののデザインをスケッチした。木と漆喰の塔門が予定通りに除幕された。」⁽⁷⁾と述べられている。誰がルトウィンズに「一時的な非宗派的な『棺台』」についてたずねたのか原文では主語がはっきりしないのだが、文脈から判断すると、政府あるいはロイド・ジョージかと思われる。つまり、オリジナルのセノタフは1919年7月19日の戦勝記念パレードに間に合うように木と漆喰で作られたものであるが、その最終的なデザインはルトウィンズの手によっても、「非宗派的な『棺台』という意匠」の基本コンセプトは政府側から提示された可能性も高い。この点は後述するように非常に重要な論点である。この一時的なオリジナルのセノタフから現在の恒久的なレプリカが作成されたわけだが、それにはそれを望む多くの国民の要求が背景にあったことはいうまでもない⁽⁸⁾。なお、オリジナルのセノタフは撤去された後、ロンドンの帝国戦争博物館に収蔵されていたが、第二次世界大戦中の爆撃で失われた。

そして戦争の記憶も生々しい1919年7月19日の戦勝記念式典と1920年11月11日の休戦記念式典は現在のRemembrance Sundayよりもはるかに厳粛な国民的行事であった。1919年の式典は「大観衆が見ている中を兵隊達が行進している。軍隊の役割は勝利を祝賀するだけでなく、死者を代表す

るものである。…（中略）…セノタフを行進している兵士たちは、言い換えるならば、死者の代わりに軍隊を構成しているのだ。」と紹介されているように兵士たちの行進が大きな要素であった⁽⁹⁾。そしてもう一つの要素が現在も行われている11時の時報を合図にした2分間の黙祷である。

11時の黙祷については次のように述べられている⁽¹⁰⁾。

午前11時、イギリスだけでなく帝国中全ての活動は中止された。往來の行き来は止められた。仕事場や工場や証券取引所において動いている人はいなかった。ロンドンにおいては一本の電話もかけられなかった。11時に出発する列車のスケジュールも2分間出発が遅らされた。人々はすでに動きを止められていた。ノッティンガムの巡回裁判所の法廷では動員解除された兵士が殺人罪で審理されていた。11時に法廷全体が囚人も含めて2分間の黙祷のために静かに起立した。その日遅く、その兵士は死刑判決を受けた。

1919年11月12日にマンチェスター・ガーディアンは前日の黙祷について次のように報告した。すなわち：「11時の最初の礼砲は魔法のような影響を与えた。市電は静かに止まり、モーターはうるさいうなり音を死んだように止めた。強力な脚の荷車を曳く馬が道を背中を曲げながら戻ってきて止まった。それはまるで馬たちの意志であるかのように見えた…。誰かが帽子を脱いだ。残りの人々もまたそわそわとためらいながらお辞儀をして頭を下げた。そこここで老兵が無意識に居眠りしては「気をつけ」の姿勢をとらされているのが見受けられた。そう遠くないところにいる一人の年老いた女性は目をぬぐい、彼女の側にいた男の人は青ざめて厳しい顔をしているように見えた。全ての人は極めて静粛に立っていた。深い静けさだった。それはロンドン市全体に広がり、聴き取れる感じで人に感銘を与えるように開会が宣言された。それはほとんど痛みのような静けさだった。そして記憶の心は静かにすべてをおおった。」

戦争の記憶の生々しさと被害の大きさがイギリス中の人々に「2分間の黙祷」＝「2分間の服喪」を強い、人々は当然のごとくそれに従ったのである。

1920年11月11日の恒久的なセノタフの除幕式とウェストミンスター・アビーの「無名戦士の墓」への埋葬については前項で述べたとおりだが、このセノタフ前の兵士の行進や人々の参拝は「生者による死者の蘇り」と受け止められたのである⁽¹¹⁾。

死者の数に何らかの意味を与えるという努力において、帝国戦争墓委員会の責任者であるフェビアン・ウェアは、もし帝国の死者が4列に並んでホワイトホールを行進してきたら、それがセノタフを通り過ぎるまでに3日と半日かかるだろうと指摘した。100万人以上の生きた人々が11月11日の除幕式と1週間後の無名戦死の墓の封印の間を通り過ぎた。ウェアのイメージと現実に1920年に起きたこととの間の一致は、だれもがこの写真に見るように、兵士たちは、死者たちが供物を受け取るために行進して引き返してきたように見えたことである。ウェアの仮想のアイデアは実態を持った。「死者は甦った」とタイムスはレポートしている。

「ウェストミンスター橋を群衆が流れていった。たくさんの人、死者がこんなにたくさん甦ったなんて思ってもみなかった。」と「荒れ地」の中でT. S. エリオットは述べている。

このように、初期の式典では兵士たちの行進（＝死者の甦り）と2分間の黙祷が中心をなしていたことが分かる。そして現在の式典よりはるかに厳粛で国民的なものであった。しかし、歳月の流れがセノタフの祭祀を徐々に変化させていった。「ロンドンの喧噪は年々セノタフを浸食していった。その静けさは消えていった。」⁽¹²⁾のである。たしかに筆者も参加した2007年のRemembrance Sundayの式典は、後述するように、厳粛で

はあったが、交通規制の外ではバスも走っていたし、日常の生活空間であった。そして退役兵達のパレードは何か賑々しい晴れやかなページェントのようであった。

第二章 セノタフはなぜ造られたのか？～一つの解釈の試み

セノタフの「無宗教性」に関するイギリス議会での討論

セノタフが作られた理由について筆者は上記モッセの指摘した点以外にも一つの事情を考慮しなければならないと考えている。セノタフが礼拝用、儀礼用の墓であることは前述の通りであるが、「遺体の入った本当の墓」＝「無名戦士の墓」がウェストミンスター・アビーにあるということは、それが英国国教会による祭祀を受けていることを当然のことながら意味している。これはアメリカのアーリントン墓地の「無名戦士の墓」とは大きく異なる要素である。ではその「礼拝用の墓」であるセノタフはどのようなのであろうか？ 次にみるようにイギリス政府の公式見解では、戦没者追悼記念碑としてのセノタフは「無宗教」の施設であり、日本政府もセノタフをそのように理解している。ここでは改めてこの点を検討してみよう。

前掲懇談会で配布された「資料1」＝『諸外国の主要な戦没者追悼施設について』によると、連合王国のセノタフについては「宗教性 なし」と記載されている⁽¹³⁾。たしかにセノタフにはキリスト教の十字架のような宗教的象徴は刻まれていない。

筆者の調べた限りにおいて、セノタフに関するイギリス議会での議論は1919年7月以降に始まり、モッセの指摘と符合するが、先にロイド・ジョージについて触れたところでも指摘しておいたが、当初から政府は「無宗教」の記念碑を構想していたと思われる。それは多くの下院議員にとって意外なことであり、好ましいことではなかった。そしてその事は「無名戦士の墓」をウェストミンスター・アビーに設置することと連動し

ていたに違いない。多くのイギリス人にとって戦没者の祭祀がキリスト教（英国国教会）によって執り行われることは当然と認識されていたからである。セノタフに関して下院では次のような討論が展開された。

「将来、我々の戦没兵士、水兵のための国家的記念碑にキリスト教の意匠が認められるのか」⁽¹⁴⁾との質問が下院で出された。それに対する政府答弁はアンドリュー・ボナー・ロウによる次のような非常にきっぱりしたものであった⁽¹⁵⁾。「セノタフは休戦記念日に帝国の全ての地域出身の至高の犠牲をなした人々に対して、国家が負っている大きな恩義を目に見える形で、彼らの宗教的信条に関わりなく表現するために建立されたものである。」

ここで「将来」と質問しているということは「無宗教」の記念碑として建立されたことを示している。しかしこの答弁の後もセノタフの「無宗教性」に対してたびたびクレームがつけられた。「我々の栄光ある死者に対してホワイトホールに建立されたセノタフは、なぜそれに対して祈ったり、神や十字架や他のキリスト教のシンボルを表現してはいけないのか？ 思うに、我が国はキリスト教の国であって、異教徒の国ではないのでは？」⁽¹⁶⁾とか、「あなたは、我々の市や町の通りに人々自身の手によって数百の戦争廟が建立され、そしてその全ての場合にそれらは何らかの宗教的象徴を持っていることをご存じか？」⁽¹⁷⁾といった質問が繰り返された。そして、「首相に質問する。あなたは、戦争で死んだ人々に対して建立されたセノタフであれ他のものであれ、戦争記念碑に表されたシンボルに、彼らはすべて信仰心を持たない人間であるという考えを排除するために、それぞれキリスト教、イスラム教、ユダヤ教などの信仰が刻まれるよう指示を与えるつもりがあるか？」⁽¹⁸⁾という質問に対して、アンドリュー・ボナー・ロウは「政府は我が同僚議員の示唆を認めることが望ましいとは考えていない。」⁽¹⁹⁾と突っぱねた（実際にボナー・ローが首相になるのはロイド・ジョージ内閣崩壊後の1922年10月23日のことである）。簡単に言えば、セノタフの「無宗教性」はこうして確保されたのであるが、

では政府はどうしてそのように考えたのだろうか？

帝国の多様性と戦争墓・戦争記念碑

連合王国を中心とした帝国は、1877年に植民地会議を設置し、それが1907年に帝国会議へと再編される。各自治領の中にも連合王国との関係を強化する立場と反対の立場があった。そして、先に述べたように第一次世界大戦に際して、各自治領諸国も参戦し相応の犠牲をはらった。そして大戦後、帝国の再編成は大きな政治的課題になった。最終的には1931年12月11日にコモンウェルス（イギリス連邦）が発足することになる。つまり、第一次世界大戦後、帝国の在り様は変化しつつあった。そしてちょうど、戦争の終結前後からコモンウェルスが成立するその時期というのは、帝国を構成する国々は膨大な数の自国の戦没兵士の墓と彼らのための記念碑を建設し、それらを恒久的に維持管理していくという課題と取り組んでいた時である。フランドル地方を中心に世界中に存在する戦争墓や記念碑の建設は当時の予想では1946年までかかる大事業であった。そして重要な点は、この課題は帝国（あるいは後のコモンウェルス）を構成するすべての国の政府に共通の目的意識を持たせ、共通の政策を実施させることに役立ったことである。戦争墓と記念碑の建設とその恒久的な維持管理は帝国戦争墓委員会が受け持ち（その財政も死者の割合にしたがった各国の負担であった）、その後組織はコモンウェルス戦争墓委員会へと発展していつて現在に至っている。

その帝国は広大な地域にまたがっており、多様な民族、多様な宗教、多様な文化等によって構成されている。つまりキリスト教一色では捉えきれない多様性を前提にしていたことが考慮されなければならなかった（例えばインドを想起してみればよい）。そこにおいて帝国で中心的役割を与えられた戦没者追悼記念碑の建設とその祭祀に当たって、少数者への配慮を欠いて、キリスト教（英国国教会）一色で行うことは各国政府、特にイギリス政府にとっては政治的に避けるべき行為であったと思われる。先のポ

ナー・ロウの答弁はこの点を指摘していたと考えられる。しかし、国内的圧力は圧倒的にキリスト教による祭祀を求めていた。私見によれば、この矛盾を「解決」するために一方では首都における英国国教会の最も重要な教会であるウェストミンスター・アビーに「無名戦士の墓」を設置し、他方において政府の所在地ホワイトホールに「無宗教」の戦没者追悼記念碑＝セノタフを建立することが必要とされたのである。

このように、「無宗教」のセノタフ（＝空の墓）は、ウェストミンスター・アビーに作られた「無名戦士の墓」（＝遺体の入った本当の墓）とワンセットになって機能しているという点に注目しなければならない。少なくともイギリスの場合、特定の宗教（英国国教会）による祭祀を行う「遺体の入った本当の墓」があるからこそ「空の墓」である記念碑の方は「無宗教」という構図がありえるのではないかと考える。

この点に関連してモッセは次のように述べている。「イタリアやフランスのようなカトリック諸国では、墓の中に死者が入ってきたが、プロテスタントのイギリスやドイツでは、休戦記念日の式典は中が空の墓の前で行われた。このことはプロテスタントとカトリックの教会で祭壇の機能が異なることと関係するか定かではないが、おそらく偶然の一致と思われる。」⁽²⁰⁾筆者は何が偶然の一致なのかこの文章からはっきりと読み取ることができないのだが、カソリックの国は「遺体の入った墓」を重視し、プロテスタントの国は「空の墓」で式典を行う、という意味と解すると、一般論としては妥当なように思われるかも知れないが、これまで述べてきたことから明らかなように、筆者はいささかこのモッセの解釈には疑問を抱かざるを得ない。墓に関して言えば、無名戦士の墓や戦争墓にはフランスであろうとイギリスであろうとドイツであろうというまでもなく遺体が入っている。そして墓と記念碑・記念廟の関係もカソリックなのかプロテスタントなのかそんなにかき決定的な違いを生んでいるとは思われない。そこで、次に、この点をもう少し詳しく考察してみよう。

第三章 各国における記念碑と墓の関係

パンテオン（フランス）とワルハラ（ドイツ）～記念廟と墓の関係①

モッセがウェストミンスター・アビーを「英国版パンテオン」と指摘していることは前述の通りである⁽²¹⁾。パンテオンは日本語訳すれば「万神殿」であり、遺体の入っている「墓」とは本来的に異なる性格の宗教施設である。すなわち、もともと多神教であった古代ローマの神々を合祀した神殿がパンテオンである。しかし、ルネッサンス期以降、宗教的色彩を薄めて、神々ではなく、王たちや、高名な芸術家や思想家たち（＝偉人）を顕彰するために合祀したのもパンテオンと称するように変化していった⁽²²⁾。この意味において、フランス・パリのパンテオンはもともと教会堂として建設が始まったが、フランス革命期に憲法制定国民議会によってフランスの偉人たちの墓所と決定され、ヴォルテールやルソーなどの墓が設置された記念廟＝「荣誉殿堂」⁽²³⁾ともいふべき施設となった。



ローマのパンテオン



パリのパンテオン



パリのパンテオンの正面

ここでこのパンテオンの歴史を概観してみよう。パンテオンの建設事業は、もともとルイ五世の病氣平癒を感謝する発意によって、当時荒廃していた聖ジュヌヴィエーヴ（パリの守護聖女）へ捧げられた修道院の改築

という形で始められた。そしてパンテオンとなるサント・ジュヌヴィエーブ聖堂はフランス革命勃発の年1789年に竣工した。そして1791年4月4日、憲法制定国民議会は「フランスの自由の時代の偉人の遺骸」を納める場所として、ローマのパンテオン（最初はアウグストゥスの片腕といわれたマルクス・アグリッパが創建し、その後焼失したが2世紀はじめにハドリアヌス帝が再建した。キリスト教公認以降、7世紀に教会に転用されて破壊を免れ古代のままの姿を現在に伝えている。）から名を借り「パンテオン」と称することを決定した。もともと聖堂として建設が始まったわけだが、フランス革命はその初期に宗教を否定したので、パンテオン（万神殿）という名前の非キリスト教的な「榮譽殿堂」に「転用」されたわけである。この際に、窓を塞いだり、内外装の改造が行われた。そのポイントはキリスト教色の排除である。しかし建物自体は上から見ると上下左右がすべて同じ長さのギリシャ十字架の形をしており、中央に巨大なドームを戴いている。このドームは、ローマのサン・ピエトロ・カテドラルとロンドンのセント・ポール・カテドラルのドームを参照して建てられた。ちなみに前者のドームは世界最大で、後者のものはそれに次ぐ規模である。そしてパリのパンテオンのドームもそれらに次いで巨大なものである。また、建物正面上部のペディメント（破風）は政治的变化にしたがって変遷をたどったが、現在その下の文言は「偉人たちに、祖国は感謝する」となっている。

革命初期にパンテオンに埋葬・合祀＝パンテオン葬（英語版のガイドブックではpantheonized）された人物を時系列に沿って並べると、ミラボー伯（1791年4月4日、政治家）、ヴォルテール（1791年7月11日、思想家）、ヴォールペール（Nicolas-Joseph Beaurepaire、兵士、1792年9月12日）、ドウ・サン＝ファルジョー（Louis Michel le Peletier de Saint-Fargeau、政治家、1793年1月24日）、ダンピエール侯爵（Augustin-Marie Picot, marquis de Dampierre、軍人、1793年5月13日）、ジャン・ポー

ル・マラー（革命家、1794年9月21日）、ジャン・ジャック・ルソー（思想家、1794年10月11日）の7人である（実はこの他に少年兵2人の合祀が決定されているが、テルミドールのクーデタでロベスピエールが失脚し中止されたが、ここではそのことは割愛する。）。ルソーを最後に1806年までパンテオンへの埋葬・合祀は中断する。1794年7月のテルミドールのクーデタで革命の一応の終結と考えれば、合祀が再開される1806年はすでにナポレオンの第一帝政期であり、詳しく後述するように、ナポレオンによってパンテオンへの埋葬・合祀が再開されたことは極めて象徴的であるといえる。

1794年までを第一期と考えて、パンテオンへの埋葬・合祀を考察してみると、それが、若干のタイムラグはあるものの、フランス革命の曲折と見事に符合していることがわかる。この7人中、現在まで合祀されているのはヴォルテールとルソーの2人だけで、彼ら以外の5人は全てその後、政治的理由でパンテオンから排除（分祀？）されていることに注目すべきであろう。ここでは以下で、ミラボー伯とマラー、ドウ・サン＝ファルジョーのパンテオン葬＝埋葬・合祀と、後に彼らを排除した経緯を簡単に跡づけてみよう⁽²⁴⁾。

全国三部会から第三身分の議員達が離脱して国民議会在が成立したのが1789年6月17日で、7月9日には憲法制定国民議会へと名称が変わり、憲法制定が課題となった。教会をパンテオンとするという決定がなされた1791年4月4日という時点は、9月に91年憲法が制定される直前である。周知のようにこの91年憲法は絶対王政の理論的根拠であった王権神授説を否定し、立憲君主制と納税資格による制限選挙を骨子としていた。つまり、この段階ではラファイエットなどのフィアン派とミラボーなどの立憲君主制派（進歩的貴族とブルジョワジー）とジロンド党（ブルジョワジーの穏健共和制派）の連合とイニシアティブが成立していた時期である。したがって、ミラボーが4月2日に急死した直後、革命に貢献した人物とし

て顕彰するために聖堂をパンテオンとする決定とそこへの遺体の埋葬がなされたのである。しかしその後、ミラボーと国王との関係が明らかになり、遺骸はパンテオンから排除されるにいたる。

そして次のヴォルテール以降、マラーが合祀される間に上記のような人々の合祀が行われたが、議員であったドウ・サン＝ファルジョーの場合は、ポイントが二点あったように思われる。第一は、出身階層よりも第三身分の部会に属していたかどうか、第二は国王の処刑に賛成したかどうか、ではないだろうか。ドウ・サン＝ファルジョーは貴族出身で三部会招集当初は第二身分の議員として選出されたが、後に第三身分に合流している（ちなみにミラボーは第二身分から立候補して落選し、第三身分で当選している）。そして国王の処刑に賛成投票している。この賛成投票が王統派の恨みを買って国王処刑前日に暗殺されたのである。彼の死は当時「自由の殉教者」として受け止められた。合祀の様子は次のようであった。「上半身は十字架降下のキリストよろしく裸で、暗殺の傷がむき出しになっていた。そして致命傷を負わせた剣や血に染まった服が掲げられるなか、ルベルチエ（ドウ・サン＝ファルジョーのこと—引用者）の遺体は葬列に担われてパンテオンまで運ばれた。パンテオンではジャコバン・クラブの活動家でもあったルベルチエの弟が追悼演説をおこない、『兄と同じように、私も暴君の死に投票する』との言葉で締めくくった」⁽²⁵⁾。この時、パンテオンが象徴する政治権力の正当性は「第三身分」、しかも国王の処刑に賛成した共和制急進派が代表していた。ミラボーの死以来わずか2年足らずの間に革命がいかにも急進したかがこの例で明らかとなる。

そして、マラーの場合はさらに極端であった。マラーの合祀はミラボーの排除とセットで1794年9月21日に行われた。1793年7月13日にジロンド派に影響されたシャーロット・コルデによって暗殺されたマラーの神格化は暗殺直後からジャコバン派によって進められたが、市民の間に急激に広がった「革命の殉教者＝マラー」への人気の高まりは予想以上にすさま

じかった。マラーの胸像やモニュメントが各地で作られ、彼を描いた扇子や皿、置物などが大量に出回った。さらに、マラーの像を聖人と置き換えた聖堂もあったし、子供にマラーと名付けることも流行した⁽²⁶⁾。こうしたブームがロベスピエールの警戒をも招き、合祀の実施は遅れ、パンテオンへの合祀は皮肉にも1794年7月27日にテルミドールのクーデタが起こり、ジャコバン独裁が崩壊した約2ヶ月後の9月21日ということになった⁽²⁷⁾。また、1797年に総裁政府はミラボーの復権をめざし遺骸をパンテオンに戻す決定をしているが、遺骸の所在が不明でこれは実現しなかった。

ジャコバン派の思想的始祖とみなされてもいるルソーの合祀がさらに遅い10月11日である。このことから、この時点まではロベスピエール、サン・ジュストら公安委員会の共和制急進派による「恐怖政治」の打破・終結が主要なテーマなのであって、革命の理念そのものが否定されたわけではなかったことがわかる。その証拠に、一例を挙げれば公安委員会内の穏健派でロベスピエールと対立していたラザール・カルノーは処刑を免れているし、革命100周年となる1889年にはパンテオンに合祀されている。テルミドールのクーデタの「反動性」が明確になるのは翌年に入ってからで、1795年2月14日に国民公会がマラーの遺骸の排除を決定し（したがってマラーはわずか6ヶ月間パンテオンに祀られていただけということになる）、その後の10月26日その国民公会も解散され総裁政府が樹立されるにいたる。マラーの場合はジャコバン独裁の「責任を問われて」排除されたわけである。残りの3人もジャコバン派であったが故にパンテオンに合祀されたわけだが、今度は逆にテルミドール期にはジャコバン派であったが故にパンテオンから排除されなければならなかったのである。イギリスにおいても王政復古後にクロムウェルをはじめ革命の指導者たちの遺骸がウェストミンスター・アビーから排除されていることを想起されたい。クロムウェルの場合はさらに遺体から首が切り取られ、さらされた。さらに残された家族も殺されるなど、王統派の激しい報復にあった。フランスの場合もルイ

一六世の処刑に賛成した議員に対する報復が復古王政期に激しく行われたことは周知の通りである。

これをもみても明らかなように、当初は革命の功労者、思想的始祖がその時の体制の正当性の根拠として葬られ、合祀され、顕彰された。そして政治体制の変化の結果、彼らは排除された。合祀したのも排除したのも時の権力ということになる。そしてその決定と施設の性格は、その後の体制の政治的立場、イデオロギーに左右された。すなわち、パンテオン+教会（ナポレオン時代）→教会（王政復古期）→パンテオン（七月王政期）→「人類の墓所」（二月革命期）→教会（ルイ・ナポレオン時代）→司令部（パリ・コンミュン期）と変遷を重ねたのである。最終的に、現在のような「無宗教」の国立墓所となったのは、1885年に国葬されたヴィクトル・ユーゴーの遺骸を収容する場所としてこの建物が選ばれたことによる。

また興味深いことは、1862年4月19日に遺族の強い要望によって1名（Louis-Joseph-Charles-Amable d'Albert）がパンテオンから家族の墓に移されているという事実である。この合祀を決定した（1807年）のはナポレオンだが、被葬者本人は本来王党派で、ナポレオンの死後、家族はどうてい王を処刑した者たちが入っていた墓所と同じ墓所に入れては置けないと考えて撤去（＝合祀解除）を申し出たものとも推測されるが、詳細は不明である（ちなみに、1862年はルイ・ナポレオンによる第二帝政期にあたる）。

現在ここに埋葬されているのは、すでに名前が出たルソー、ヴォルテール、ユーゴーを別にすれば、キュリー夫妻、アレクサンデル・デュマ、ジャン・ジョレス、アンドレ・マルロー、ジャン・モネ、ジャン・ムーラン、ルネ・デカルト、エミール・ゾラなど72名にのぼる（前述のように5名の排除と1名の移動を除く）。

次表はパンテオンへの合祀決定の年と人数と被合祀者の一覧である。（排除された者、移された者も含む）ちなみに、合祀の決定を誰（どの機

関) がするののか, という点については1791年は憲法制定議会, 1794~95年は国民公会, 1804~14年はナポレオン, 第三共和政~第四共和政(1871年~1959年)は議員による提案・決定, そして現在の第五共和制以降は共和国大統領ということになっている。

- 1791 2名 Count de Mirabeau (removed), politician
Voltaire, philosopher
- 1792 1名 Nicolas-Joseph Beaurepaire (missing), soldier
- 1793 2名 Louis-Michel Le Peletier de Sint-fargeau (removed), politician
Marquis de Dampierre (missing), general
- 1794 2名 Jean-Paul Marat (removed), polotician
Jean-Jacques Rousseau, philosopher
- 1806 2名 Francois-Denis Tronchet, politician
Claud-Louis Petiet, politician
- 1807 4名 Jean-Baptiste-Pierre Beviere, politician
Louis-Joseph-Charles-Amable (removed)
Jean-Etienne-Marie, politician
Louis-Pierre Pantaleon Resnier, politician
- 1808 6名 Antoine-Cesar de Choiseul
Jean-Frederic Perregaux, banker
Jean-Pierre-Firmin, general
Pierre-Jean-Georges Cabanis, general
Francois-Bathelemy Beguinot, general
Gabriel-Louis Pantaleon Resnier, politician
- 1809 7名 Jerome-Louis-Francois-Joseph-Marie, politician
Jean-Baptiste Papin, politician
Joseph-Marie, painter
Pierre Garnier, general
Justin-Bonaventure, admiral
Jean-Pierre, general
Emmanuel Cretet, politician
- 1810 5名 Louis-Vincent-Joseph Le Blond, general
Jean-Lannes, marechal
Giovanni Battista, Papal Legate of paris
Chales-Pierre Claret, politician
Jean Baptiste, politician

- 1811 6名 Nicolas-Marie, general
 Chales, ecclesiastical
 Ippolito Antonio, ecclesiastical
 Alexandre-Antonie Hureau
 Michel, general
 Louia-Antonie, navigator
- 1812 2名 Jean-Guillaume De Winter, marechal
 Jean-Marie-Pierre-Francois Le paige, general
- 1813 6名 Joseph-Louis, mathematician
 Jean-Ignace Jacqueminot, politician
 Hyacinthe-Hughes-Timoleon de Cosse, politician
 Francois-Marie-Joseph-Justin, politician
 Jean, politician
 Frederic-Henry, soldier
- 1814 3名 Jean-Nicolas, politician
 Jean-Louis-Ebenezer, general
 Claude-Ambroise Regnier, polotician
- 1815 2名 Claude-Juste-Alexandre, general
 Antonie-Jean-marie, vice-admiral
- 1829 1名 Jacques-Germain Soufflot, architect
- 1885 1名 Victor Hugo, writer
- 1889 4名 Theophile-Malo Corret de La Tour d'Auvergne, soldier
 Lazare-Nicolas-Marguerite, general
 Jean-Baptiste Baudin, doctor
 Francois-Severin Marceau-Desgraviers, general
- 1894 1名 Sadi Carnot, President of the French Republic
- 1907 2名 Marcellin Berthelot, chemist
 Sophie Berthelot
- 1908 1名 Emile Zola, writer
- 1920 1名 Leon Gambetta, politician
- 1924 1名 Jean Jaures, politician
- 1933 1名 Paul Painleve, mathematiciam
- 1948 2名 Paul Langevin, physicist
 Jean Perrin, physicist
- 1949 2名 Adolphe-Sylvestre-Felix Eboue, colonial administrator
 Victor Schoelcher, politician
- 1952 1名 Louis Braille, teacher

- 1964 1名 Jean Moulin, resistancefighter
1987 1名 Rene Cassin, lawyer
1988 1名 Jean Monnet, economist
1989 3名 Abbe baptiste-Henri Gregoire, ecclesiastical
Gaspard Monge, mathematician
Condorcet, mathematician
1995 2名 Pierre and Marie Curie,physicists
1966 1名 Andre Malraux,writer
2002 1名 Alexandre Dumas,writer

政治家、革命家はミラボー、マラーたちに限らず、レーニン、スターリン、そしてフセインの例を見れば明らかなように、政治体制が変われば評価も変わるので「普遍性」を保ちにくいとは言えよう。しかし、上記のように、ジャコバン派が排除されて以降、軍人や政治家も多数埋葬、合祀されているが、それは圧倒的に1806年から1815年までの間が多い（合計43名で全体の半数以上）ことがこの一覧表からわかる。この時期はいうまでもなくナポレオンの第一帝政期である。ナポレオンは地上部分をカソリックの聖堂として、地下のクリプトを引き続き「偉人の霊廟」としたのである。この場合被葬者は「偉大な高官、帝政や王権の偉大な官吏、元老院議員、レジオン・ドヌール勲章のグラントフィシェ章保持者、さらに軍、行政、文学の分野で祖国に対して顕著な貢献をなした市民で、法令により特別に認められた者」となっていた。ナポレオンはその支配にパンテオンをフルに活用したとってよいであろう。ナポレオンがアンシャン・レジームとフランス革命を共に「止揚」しようとしていた意図がこのことからもうかがえよう⁽²⁸⁾。

そしてその間の合祀がジャコバン派の排除の場合と異なって、そのまま現在に受け継がれているということは、第一帝政期をその後のフランスの歴代政権が否定していないことを意味する。このことは逆にジャコバン独裁を「恐怖政治」とイコールと見なして否定的に評価することと対をなしている。やはり、フランス近代史においては、依然として1789年と1791年、

そして1793年の評価が大きな歴史的問題であることがこのことからもうかがえよう。

そしてナポレオン没落後、復古王政、七月王政、第二共和制、第二帝政と政治体制はめまぐるしく変化したが、これらの政治体制はパンテオンを活用していない。というよりはできなかつたという方が適切であろう（復古王政はナポレオンの影響力の排除に躍起となったが、それを成し遂げるほど長続きできなかつた。）。復古王政末期の1829年に一名だけが「埋葬」されているに過ぎない⁽²⁹⁾。

パンテオンへの合祀が本格的に復活するのは第三共和制下においてである。1885年のヴィクトル・ユーゴー以降、エミール・ゾラ（1908年）やレオン・ガンベッタ（1920年）、ジャン・ジョレス（1924）など、次第に合祀者は増えていったが、注目すべきは1889年が革命100周年に当たり、この時、前述の公安委員会の反ロベスピエール派で穏健共和主義者であったラザール・カルノーをはじめ革命期の軍人3名と第二共和制期の議員1名の計4名が合祀されたことである。つまり、第三共和制はフランス革命を評価するが、それは反ロベスピエール派の穏健共和制派までのことであることが示されているといてよい。そして1933年で合祀はまたしばらく中断する。この年はドイツでヒトラーが首相に就任し、国際連盟から脱退した年で、ヨーロッパに戦雲が立ちはじめてきた時期である。

戦後の1948になって合祀が再開する。ド・ゴールは戦後直後に臨時政府首相に就任するが1946年1月には下野しており、その間合祀は行っていない。その後、アルジェリア問題を契機に1958年9月にド・ゴールは第五共和制を成立させ初代大統領に就任した。11年に及ぶ任期中にレジスタンス全国委員会委員長で1943年にゲシュタポによって殺害されたジャン・ムーラン1名のみを合祀決定している（1964年）。ムーランはロンドンに亡命していたド・ゴールに代わって、フランス国内でレジスタンスを指導していた。ド・ゴールは戦争で死んだ全レジスタンスの象徴としてムーランを

合祀したものと考えられる。その後のボンピドゥー、ジスカール・デスタンの両大統領は一名も合祀決定していない。

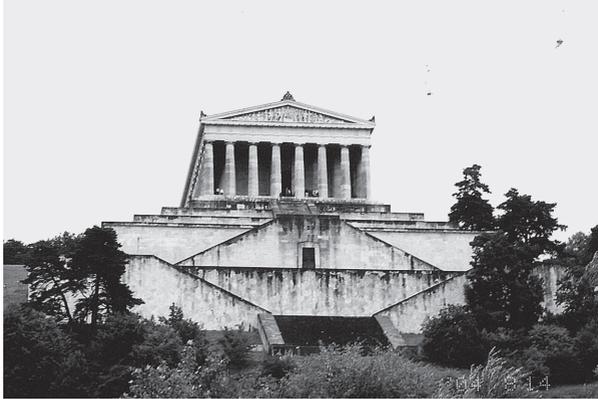
そして第5共和制になって比較的多く5名の合祀を決定したのはミッテラン大統領である。1988年にはEUの先駆者としてのジャン・モネ（エコノミスト）を、1989年はフランス革命200年祭に当たり、コンドルセのように死後200年も経って合祀されたものもいる。シラク大統領は任期中に4名を合祀決定している。キュリー夫妻（1995年）、マルロー（1996年）、そして『三銃士』のアレクサンデル・デュマ（2002年）である。ここにそれぞれの政権の政治的「思惑」が反映されているように思われる。

以上、見てきたように、パンテオンは施設の性格そのものが時の政治体制によって左右され、また、合祀とその解除が行われた歴史を持つことがわかる。

そして、パンテオンでは遺骨が入った棺（もしくは心臓の入った壺－レオン・ガンベッタの場合）の設置が「合祀」と同意義であり、パンテオン葬そのものが顕彰を意味した。しかし、フランスでは公の場所で特定の宗教を表現することは法律で堅く禁じられている（ライシテ）ことも考慮されなければならない。つまり、パンテオンではカソリックによる祭祀が行われているわけではない。しかしパンテオンに入ると、入り口の左右の壁の上部にはイエズス会の紋章が今も残っており、堂内には聖ジュヌビエーブの物語がフレスコ画で描かれ、その地下は明らかに地下墓所（crypt）そのものであることも間違いない施設なのである⁽³⁰⁾。なお、地下墓所にはまだかなり余裕があり、これからの埋葬も充分可能で、将来一体誰が埋葬されるのか、ということは以上見てきたように、時の政権の考え方が反映するという意味で興味深い点である。

これに対して、ドイツ・レーゲンスブルグ近郊のドナウ河畔北側丘陵に建つワルハラは原義通りのパンテオンとしての性格を持っているとあってよい。ワルハラは19世紀半ばにバイエルン王ルートヴィヒ1世によって

建てられたが、ここは墓所ではなく、ドイツを代表する国王、政治家、軍人たちや芸術家、文化人たちの石像、胸像が多数安置され、建物もキリスト教会ではなくギリシャ神殿風である。



レーゲンスブルグ郊外のワルハラ（ドナウ河畔から見上げたところ）



ワルハラ内部の様子

ワルハラとはワーグナーの楽劇「ニーベルングの指輪」にもあるように、北方神話における神々の住まう城であり、また、戦死した英雄たちの魂の安息の場である。しかし、ドナウ川周遊の観光客で賑わうレーゲンスブルグのワルハラ（河畔の丘の上にあって見晴らしがよい）に宗教的色彩は薄い。事実筆者が行った時には結婚式のパーティーの一行が「観光名所」として訪れていたが、それでもそこはパンテオンとしてたくさんの人々が合祀されている施設なのである⁽³¹⁾。また、ワルハラ落成式の翌日に、ワルハラからほど近いレーゲンスブルグ郊外のドナウ河畔の丘陵の上でルードヴィッヒ1世によってもう一つの記念堂の定礎式が行われた。これが対ナポレオン戦争の「解放記念堂」である。この建物はローマのパンテオンを模したようなドームを戴く円形の内部空間を持ち、三四体のヴィクトリア像（対ナポレオン戦争に参加した連邦諸邦三四の諸国民に照応）が手をつなぎ合って作る輪のみで構成される抽象的、寓意的な意匠となっている（なお、建物上部に戦争で活躍した将軍の名前のプレートが掲げられている）。「解放記念堂」もナポレオンからの解放を記念したもので墓ではない。同じ意図で建設されたより巨大な記念碑であるライプツィヒの「諸国民戦争記念碑」の方が、より戦死者を悼む意図が濃厚である。しかしこれもまた墓の機能は持っていない。

このようにパンテオンと言っても「祀り」において「墓」の性格を持つもの、持たないものの両方があるし、概して宗教性はあまり高くはないが、まったくないわけではない。そして複数の人を一つの施設に合わせ祀る＝「合祀」という点で共通している。これらのことを前提に次にイギリスの場合を考えてみよう。

ウェストミンスター・アビーとセント・ポール・カテドラル～記念廟と墓の関係②

ウェストミンスター・アビーは歴代国王の即位式が行われ、墓所ともなっており、王家との関係が特別深い寺院である。訪れたことのある人は、そこ

にエリザベス1世をはじめ歴代国王たちだけでなく、グラッドストーン、小ピット、大ピットなどイギリスを代表する高名な政治家やアイザック・ニュートン、サミュエル・ジョンソンなどたくさん「有名人」が葬られていることを知る。その意味において、ウェストミンスター・アビーを「英国版パンテオン」とするモッセの指摘は外れているわけではない。

しかしロンドンにはもう一つ英国国教会の重要な寺院であるセント・ポール・カテドラルがあり、そこには対ナポレオン戦争の司令官であったネルソン提督、ウェリントン公（アーサー・ウェルズリー）などが葬られ、同時に顕彰されている。そして、ここにはその他の軍人の記念碑もたくさん設置され、中にはT.E.ロレンス（アラビアのロレンス）の胸像などもある。またウィンストン・チャーチルの葬儀はウェストミンスター・アビーではなくセント・ポール・カテドラルで行われている⁽¹⁷⁾。

このように、ウェストミンスター・アビーは墓所としての性格が強く、セント・ポール・カテドラルは墓の数は少なく軍人の記念碑が多いという点では、イギリスにおけるパンテオンという意味では、ウェストミンスター・アビーよりはセント・ポール・カテドラルの方がふさわしいようにも思われる。ただし、セント・ポール・カテドラルは1666年のロンドン大火で焼失し、再建された現在のものは1710年に竣工した。ここへの墓の設置はネルソン提督、ウェリントン公の例でわかるように、対ナポレオン戦争以降のことである。パリのパンテオンはフランス革命を契機に政治的顕彰のための施設＝榮譽殿堂になったのと同様に、セント・ポール・カテドラルは対ナポレオン戦争以降のイギリスの軍事的性格のパンテオンといえるかも知れない。あるいは、イギリスには文字通りのパンテオンは存在せず、英国国教会の両寺院がそうした性格を代行しているとはいえるであろう⁽³²⁾。

以上のように、実際の教会であるかどうかを別にすればイギリスもフランスも榮譽殿堂と墓の関係では類似しており、カソリックであるかプロテスタントであるかはあまり本質的な問題ではないというのが筆者の見解である。

エトワール凱旋門・廃兵院ドーム教会・祖国の祭壇とセノタフ～記念廟と墓の関係③

フランスの「無名戦士の墓」はパリのエトワール凱旋門に設置されている。「無名戦士」をどこに葬るかということについてはフランス国内でも激しい議論があった。実はパンテオンも有力な候補地だったのである。そして、第三共和制成立50周年に合わせてパンテオンに合祀されたレオン・ガンベッタ（の心臓）と並んで、「無名戦士の墓」をパンテオンに設置する問題が起きたが、反対意見も多く、それは凱旋門こそふさわしいと主張していた。議会でも激しいやりとりがおこなわれたが、結局、パンテオンではなく凱旋門に決まったという経緯があった。その背景には、パンテオンが「偉人」たちの祀られているところであって、「無名戦士は息子を失った全ての母親の息子であって、たんなる偉人などではない」という考え方があった。これが共和制穏健派の新聞の主張であり、右派議員たちは「パンテオンは共和制のシンボルではあっても国民全体のシンボルではない」と主張した⁽³³⁾。つまり、第一次大戦後、パンテオンは名実共にネイションを代表する場とは認められていなかったのである。

エトワール凱旋門は周知のようにナポレオンによって1806年にアウステルリッツ会戦の軍事的勝利を記念して建設が始まったが、完成したのはナポレオン死後の1836年である。凱旋門とはそもそも戦勝記念碑であり、その門をくぐって凱旋式を執り行うために建てられたもので、現存のものとして古くはローマのコンスタンティヌスの凱旋門（コロッセオの側）、セプテミウス・セヴェルスの凱旋門（これをモデルにナポレオンによって作られたのがルーブル宮の側にあるカルーセルの凱旋門である）、ティトの凱旋門（両者ともフォロ・ロマーノの中）がよく知られている。エトワール凱旋門も古代ローマのそれを模してより巨大なものとして建てられた。ベルリンのブランデンブルグ門はギリシャ様式の凱旋門であり、ミュンヘンにもローマ風の凱旋門がある。そして、第一次世界大戦後「無名戦

士の墓」が上記のような事情でエトワール凱旋門に設置された。古代はともかく、エトワール凱旋門そのものは凱旋式を行うための戦勝記念碑であるからそれ自体に宗教性はない。現在は大きなフランス国旗がアーチの真ん中に翻り、第一次世界大戦だけでなく、第二次世界大戦や植民地戦争を含めた戦没者もここで記念されている。その意味では、エトワール凱旋門の「無名戦士の墓」は国民国家としての（そして帝国の記念碑としての）性格を強く持っていると言ってよいであろう。



上：エトワール凱旋門

下：エトワール凱旋門の下に作られた無名戦士の墓

パリには記念碑と墓の関係でもう一つ重要な場所がある。それは廃兵院（アンヴァリッド）のドーム教会である。廃兵院はもともとルイー四世が傷病兵の看護のための施設として設置したもので、現在ではナポレオンなどの墓所、軍事博物館などとして機能している。それに付属するドーム教会はナポレオンが執政政府時代にテュレンヌ元帥を葬ってから墓所としての機能を持つようになった。そしてここには後に第一次世界大戦の著名な将軍フォッシュの墓も作られた。その墓はフォッシュの遺体を兵士達が担いでいるリアルだが象徴的な図像である。

そもそもここが注目されたのは、1840年にナポレオンの遺骸がセント・ヘレナから改葬されて安置されることになって以降のことであった。このナポレオンの遺骸の埋葬先についてもいろいろ議論があった。パンテオン、エトワール凱旋門、そしてヴァンドーム広場の記念柱などが候補に挙がった。しかし、最終的にアンヴァリッドに決まった。それは、ナポレオンは死してなおフランス政界の大惑星であって、そのため、葬る場所としては「政治的危険いっさいを免れる場所であり、威厳に満ちた場所であると同時に、パンテオンやサン＝ドニ聖廟聖堂よりも政治的色彩が薄いと思われる場所」である必要があったからである⁽³⁴⁾。教会に入ると、フォッシュなど著名な軍人たちとナポレオンの兄（ジョセフ、元スペイン国王）、弟（ジェローム、元ヴェストファーレン国王）などの墓が地上階に、教会の黄金のドームの真下の地階にナポレオンの巨大な赤い石の棺が置かれ、その奥に民法典を掲げたナポレオンの像と息子（ナポレオン二世＝元ローマ王、ライヒシュタット公）の墓がある。これは教会がナポレオン一族の墓所と記念廟になっている例である。ここは教会そのものであるが、近代以降のフランスの軍事的栄光の輝ける象徴としてのナポレオンの記念碑であると言った方がよいであろう。さらにこのドーム教会と隣接して「兵士の教会」がある。ここには戦場で獲得した敵の旗が多数飾られ、軍隊の名誉を現している。そしてナポレオンがドーム教会に改葬された政治的理由の他にも

う一つの理由は、ここが軍隊との関係が深い施設であったからである⁽³⁵⁾



上：ドーム教会正面
下：ドームの真下のナポレオンの棺

次に、イタリアにおける「無名戦士の墓」はローマの「祖国の祭壇」とみなされている。これは、戦没者追悼とは全く関係のなかったイタリア統一の巨大な記念建造物（＝ヴィットリオ・エマニュエル二世記念堂）に1921年になって無名戦士一名が埋葬されたものである。「無名戦士の墓」そのものは1935年に記念堂の別の場所移されたため、現在祭壇には遺体は埋められていない。しかし、ここには両脇に聖火が焚かれ武装兵士が警備する象徴的祭壇となっている。つまりエトワール凱旋門と同じように、先に存在した記念碑に後で「無名戦士の墓」が付け加えられ、現在では祭壇がそれを象徴している。



ローマの祖国の祭壇



祖国の祭壇に作られた無名戦士の墓

イギリスの場合は、前述のように「無名戦士の墓」と戦没者追悼記念碑セノタフは別の場所にあるが、両者の距離は非常に近い。歩いて4～5分というところか。そして、何よりも重要な点は両者は「本当の墓」と「儀礼用の墓」というワンセットで機能しているという事実である。そして本稿との関係では「無名戦士の墓」がセント・ポール・カテドラルではなくウェストミンスター・アビーに設置されたことの政治的意味を考えると重要であろう。それはおそらく王家との関係とセノタフとの近さであろう。つまり、第一次世界大戦の帝国の全戦没兵士を象徴する墓はウェストミンスター・アビーに作られなければならなかったと考えられる。

両大戦の敗戦国であるドイツにおいては「無名戦士の墓」建設そのものが「はばかられた」ためにノイエ・バッヒェが追悼施設とされたというの

が実際のところであろう。

つまり、以上見てきたように、セノタフをはじめとした「無宗教」の記念碑や記念廟を「無宗教」故に是としたのでは見落とされるものがたくさんあるのではないかと考える。

「榮譽殿堂」という形式～記念廟と墓の関係④

以上見てきたように、パリのパンテオンに典型的に見られる複数の人が合祀された記念廟（碑）の形式が重要であると考ええる。その際、重要な論点は合祀・顕彰であって、そこに墓が実際に設置されているのかいないのかは独自の事情によるのであって、決定的な要素ではないと考えている。

現存しないが、検討すべき例をもう一つ挙げると、バイエルンの州都ミュンヘンにかつて存在したナチスの「榮譽堂」がある。ミュンヘンは、第三帝国時代は「運動首都」の性格が与えられ、ナチス党本部（現在の図書館、州立グラフィック館）、総統官邸（現ミュンヘン音楽演劇大学）などが置かれていた。二つの建物の間に現在は撤去されて雑草の茂る遺構の敷石しか残っていないが、ミュンヘン・プッチの犠牲者を埋葬した「榮譽堂」が二つ造られた。ミュンヘン・プッチはナチスにとっては、政権獲得に至る始点として重要な出来事で、その犠牲者はナチスにとっては「聖別」に値するものであった。そのため、党と国家にとって重要な二つの施設の間に「榮譽堂」を造り、1935年11月9日に遺体を改葬したのである。そして戦後、党本部と総統官邸は他の用途に転用されたが、「榮譽堂」はナチズムの記念廟として撤去された。

筆者は複数の人間を合祀し顕彰するたこうした施設を「榮譽殿堂」と呼びたい。この場合、パリのパンテオンやミュンヘンの「榮譽堂」のように実際に遺体を埋葬したパターンと、レーゲンスブルグのワルハラのように墓の機能を持たないパターンが考えられる。

第四章 戦争記念碑と宗教性～セノタフは本当に「無宗教」か？

Remembrance Sundayの考察

前述の通りセノタフの「無宗教性」が確保されたプロセスを明らかにしたが、では実際のセノタフは本当に「無宗教」なのであろうか？ 残念ながら、筆者はそれに対していささか否定的にならざるを得ない。

2007年11月11日は日曜日でまさにRemembrance Sundayであった。この日ホワイトホールで行われた式典に参加してみても見聞きしたことを材料に考えてみたい。

式典の大まかな流れを会場で配布された式次第を参照しながら跡づけてみよう。

午前一〇時半頃ウェストミンスター・アビーの方向から軍楽隊がマーチング演奏しながらホワイトホールのセノタフの前まで進んでくる。全部で六隊ほどいたようだ（警察の音楽隊も参加）。――時のビッグベンの鐘を合図に空砲が一発鳴り響き、二分間の黙祷が捧げられる。この黙祷には次の内容が含まれている。

われわれは二つの世界大戦で大きな犠牲を払った人々を追悼する。

われわれはその他の戦いで国に命を捧げた人々を追悼する。

われわれはその時に苦しめられた人々のために祈る。

われわれは遺族のために祈る。

われわれは平和のために祈る。

われわれは身代わりになされた犠牲にわれわれが値するものであるように祈る。

次の空砲で黙祷を終える。そして、セノタフへの女王の献花（赤いポピーの造花の花輪）が行われ、その後王族や政府首脳、三軍の長や遺族代

表と思われる人々の献花が続く。その間、各軍楽隊は高い演台に設えられた指揮席からの総指揮者の指揮により哀悼の意を表す曲を交互に数曲演奏する。そして式典のクライマックスはロンドン司教（ウェストミンスター・アビーの司教）による礼拝である。

全能なる神よ、われらはここに嘆願する
国家と国王への奉仕で死んだ人々を記念するためにここに敬意を表する
われわれは彼らの愛と不屈の精神によって鼓舞される。
全ての自己中心的な卑しむべき動機を忘れて、われらの主なるイエス・キリストを通して神の栄光と人間のつとめにのみ生きるであろう
アーメン

そして賛美歌が軍楽隊の伴奏で歌われる。全ての参会者は合唱に加わるよう求められる。次にロンドン司教は祈禱を捧げる。全ての参会者は司教の祈禱に唱和するよう求められる。最後にロンドン司教は祝福の言葉を述べる。

神の慈悲と加護のもと、われらはあなたにゆだねる
神はあなたを祝福し護る
神はあなたの上に顔を輝かせる
そしてあなたに慈悲を与える
神はあなたに許しの光を与える
そしてあなたに今日と永久の平和を与える
アーメン

式次第に礼拝の言葉が書かれていることもあって、一般市民も含めた参加者は最後に見事に声を揃えて「アーメン」と唱える。そして国歌が斉唱

される。それが終わると女王以下政府、軍などの要人や遺族代表たちは退席し、後はにぎやかなマーチの演奏によってトラファルガー広場方面から進んできた退役軍人たちのパレードが延々と続く。彼らはセノタフの前に来ると行進しながら敬礼し赤いポピーの造花でできた花輪を捧げる。(実際にはセノタフの前にいる係員に渡すと彼らがセノタフに捧げる。) その間、市民の参加者は彼らにささやかな拍手を送りつづける。こうして三時間あまりの式典は交通規制が解除され流れ解散となる。式典の終わり頃になるとセノタフの周りには臨時的鉄柵が設けられ花輪などは置かれたままの状態が保たれる。

セノタフそれ自体は前述のように背の高い棺台に載った棺という意匠で、十字架が刻まれているわけではなく、木の枝で作られた輪がレリーフされているだけである。そしてそれにはTHE GROLIOUS DEADと刻まれている。この言葉は「栄光ある死者」ということであるから日本語に直せば「英霊」が一番近いニュアンスと考えてもよい。

また、式典での二分間の黙祷は時の国王ジョージ五世からの提案によるもので(一九一九年五月、London Evening Newsに掲載された、ジャーナリストEdward George Honeyの手紙が、当時の国王ジョージ五世の目に留まり、同年11月7日に"11日当日は黙祷を捧げること"と発表されたという。)、全ての人が仕事の手を休め沈黙の祈りを捧げるものである。一時に黙祷するのは、それが休戦条約が発効した時間だからである。

この日に戦没兵士に捧げられる赤いポピーの造花は、大戦時のカナダ軍人ジョン・マックレア(John McCrae)の“In Flanders Fields”という詩に由来するといわれている。最初にふれたようにフランダースの戦場には赤いポピーの花が咲き乱れていたのだが、“In Flanders Fields the poppies blow …… We shall not sleep, though poppies grow In Flanders Fields”という詩に触発されたアメリカ人女性がポピーを一輪胸に挿し残りを人にも分けたことに端を発し、広がった。1921年から在郷軍人会

(Royal British Legion) が募金活動として紙の造花を販売し始めた。当時800万本売ったという。これは街頭募金の他、学校やパブなどにも置かれ広く市民に行き渡った。その利益は退役軍人の福祉をはじめ、戦争墓の維持管理にも使われているというから帝国戦争墓委員会（後のイギリス連邦戦争墓委員会）にも相応の寄付がなされてきたものと思われる。

以上がセノタフにおけるRemembrance Sundayのセレモニーの概要である。つまり、セノタフが「無宗教」というのは実際は建前に過ぎず、それは、花輪が捧げられ（「われわれは忘れない」と書かれているものや、部隊の徽章が中央に描かれている）、旗が立てられ、人々が供物を捧げ（式典の時に供物はないが、日常的にセノタフには花輪の他に飲み物や食べ物が置かれていることは多くはないが珍しいことでもない）、式典ではキリスト教の祭祀が行われる宗教的施設として機能する一面を「本質的」に持っているのである。なぜなら、人が何かを「祈念する」という行為においては、祈念される対象は宗教性を免れ得ないからである。ましてやセノタフは帝国・コモンウェルスの全戦没兵士を追悼・顕彰する記念碑だからである。

こうした施設においては「無宗教」とは特定の宗教、宗派に特化した意匠を持たないという程度の意味しかないことを前提に議論しなければならないだろう。前掲『諸外国の主要な戦没者追悼施設について』にはセノタフでの追悼行事の式次第がのっているが、そこにも黙祷、献花の後、最後に「英国国教会ロンドン司教の司会による礼拝、英国国歌斉唱が行われる」と記されている（註）。その意味では、セノタフに批判的な意見を述べた下院議員の「なぜそれに対して祈ったり、神や十字架や他のキリスト教のシンボルを現してはいけないのか？」という疑問や「我々の市や町の通りに人々自身の手によって数百の戦争廟が建立され、そしてその全ての場合にそれらは何らかの宗教的象徴を持っている」という批判は反面、現実的に問題の核心を衝いていたとさえいえるであろう。

またRemembrance Sundayが近くなると、ウェストミンスター・アビーの敷地の芝生の上には戦没した兵士の小さな木の十字架が陸海空ごとに区域が分けられて部隊ごとにびっしりと立てられる。セノタフを訪れた人の多くがこれを観に立ち寄る。両者の関係は今もお深い。

ノイエ・バッへの考察から見た記念碑の重層性と象徴性～日本の問題状況への逆照射

以上見てきたように、セノタフは二重の性格の記念碑であることが分かって来よう。本質的には「儀礼用の墓」として機能しているが、建前上はあくまでも「無宗教」の戦没者追悼記念碑である。その「無宗教」の記念碑で宗教的色彩を濃厚に持つ儀式がとりおこなわれているのである。

実は、この種の記念碑（記念廟）は前記の理由で似たような性格を持たざるを得ない。ベルリンのノイエ・ヴァッヒェ（新衛兵所）も同様であると筆者は考えている。この施設はもともとカール・フリードリッヒ・シンケルの設計により新古典主義の様式で建てられたプロイセンの王宮衛兵詰り所であった（1818年～1918年）が、ハインリッヒ・テセノウの手によって一部改築がなされ（天井中央に開けられた丸い開口部など）第二帝政崩壊後の1931年から1945年までプロイセン州立の戦没兵士追悼所になった。その時期はワイマール共和国時代と第三帝国時代にまたがっている。ワイマール共和国時代には、中は中央に石の祭壇（？）が設置され、その上には「戦場で誰かの命を救った市民や兵士にローマの元老院が授けた市民の栄冠（コロナ・シヴィカ）」⁽³⁶⁾を模した銀の櫛の葉の輪が置かれただけの簡素な造りになっていた。



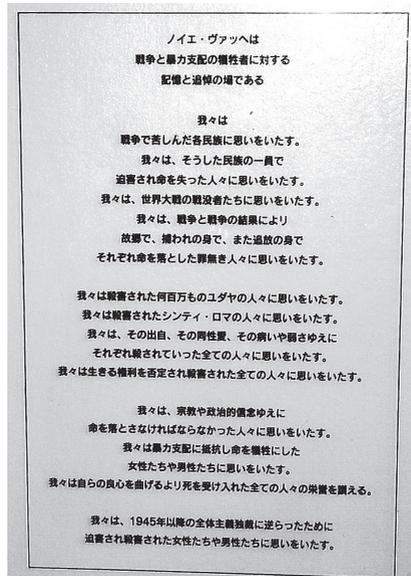
上：ノイエヴァッヒェに飾られるコロナシビカ
下：ノイエヴァッヒェ正面全景

注目すべきなのは、建物がギリシャ建築風であり、内部も特にキリスト教的な意匠が強調されていなかった施設だったという点である。しかしナチスは1933年の政権獲得後、祭壇の後方に新帝国におけるキリスト教民族のシンボルとして大きな十字架を掲げる改造を施した。そして敗戦後、第三帝国時代のものを取り除かれ、東ドイツ時代の1960年から90年にかけては国立の「ファシズムと軍国主義の犠牲者のための警告廟」となり、さらに1993年からは統一されたドイツ連邦の国立の「中央戦争犠牲者追悼所」となって現在に至っている。

ここで現在追悼されている対象は「戦争と暴力支配の犠牲者」であるが、東ドイツ時代の「ファシズムと軍国主義の犠牲者」とはナチス支配による犠牲者とはほぼ同一視されてきた。当然ユダヤ人や反ナチの政治犯などが主

な対象である。しかし現在はその暴力支配の中に東ドイツ時代の社会主義の支配による被害も含まれていることになるし、戦没したドイツ兵つまり例えば武装親衛隊の兵士もこの施設で追悼されていることになる。この点をとらえて「被害と加害の区別が曖昧になっている」としてユダヤ人団体などはこの施設をボイコットしている。こうした施設そのものの歴史的重層性とその意味を無視してノイエ・ヴァッヒェを解釈することはできない。それは靖国問題も同じであろう。

それと共に重要なことは、その祭祀あるいは追悼の象徴が問題とされなければならない。前掲『諸外国の主要な戦没者追悼施設について』にはこの記念廟も「宗教性 なし」と記されている⁽³⁷⁾が、現在ノイエ・ヴァッヒェの中央に安置されているのはケーテ・コルヴィッツ作の「死んだ息子を抱きかかえる母親像」である。それは間違いなくピエタのバリエーションであることが重要である。



ノイエヴァッヒェ入口に掲げられている日本語



「ノイエ・ヴァッヘ」(直訳では「新衛兵所」)は、カール・フリードリッヒ・シッケルの設計によりプロイセン王ラートリッヒ・ヴィルヘルム三世のために1816年から1818年にかけて建設されました。ここには1818年から1918年まで国王直属の衛兵(ヴァッヘ)が配備されていました。

1931年、当時のプロイセン政府はこのノイエ・ヴァッヘを改築、ハインリッヒ・テッセノウの設計で「世界大戦戦没者慰霊館」を設立しました。訪れる人々を慰めようとする意図の中央には、銀色の鉛筆の痕を記した花崗岩の岩塊が置かれていました。

第二次世界大戦終結の直前、ノイエ・ヴァッヘは爆撃により大きな損傷を蒙りました。

ノイエ・ヴァッヘの建物は旧ドイツ民主共和国(旧東独)により再建され、1960年以降、「ファシズムと軍国主義の犠牲者慰霊館」として使用されるようになりました。また1969年からは、屋内中央に永遠の炎が灯されていました。

1969年、無名戦士一名と強制収容所の無名犠牲者一名の亡骸がここに葬られました。この亡骸は第二次世界大戦の戦場と強制収容所の土地からもってきた土に埋葬されています。

1993年、ノイエ・ヴァッヘはドイツ連邦共和国中央図書館となりました。

室内は大部分ワイマール共和国時代の状態が再現されています。慰霊館の中央にはケーテ・コルヴィッツの作品「死んだ息子を抱く母」を拡大した像が立っています。この拡大像はハラルド・ハーケの制作によるものです。

ノイエ・ヴァッヘはファシズムと暴力支配の犠牲者に対する記憶と追悼の場です。

左：ノイエヴァッヒェ内に置かれたケーテ・コルヴィッツ作の像(レプリカ)
右：ノイエヴァッヒェのゆらいの文章

ピエタとはいうまでもなく、磔刑にかかって死んだキリストを抱きかかえる母マリアの図像をいうが、ノイエ・ヴァッヒェのこの像はオリジナルの作品を何倍にも拡大して大きくした一種のレプリカである。ケーテ・コルヴィッツは高名な社会主義的傾向の芸術家であり、当然ナチスからは「退廃芸術」とレッテルをはられた。そして自身息子を第一次世界大戦で孫を第二次世界大戦で失った母親、祖母でもあったことから選ばれたのだろうと思うが、典型的なキリスト教の図像の変形であることにはかわりはない。キリスト教徒の人々はこれを観てすぐにピエタを連想するであろう。なお、ノイエ・ヴァッヘには前述のワイマール時代の銀の楯の葉の輪(現在ベルリンのリーリエンターラー墓地に保管されている)が一定期間安置されることになっている。

前述のように、敗戦国のドイツには「無名戦士の墓」を造ることができなかった。そのため、ノイエ・ヴァッヒェに全戦没兵士の象徴として母親に抱かれた若い死者という図像を安置したのではないか。そしてケーテ・コルビッツ作の死んだ息子を抱きかかえている母親像は優れた彫刻作品で、戦争で死んだ者への深い悲しみと追悼の念を表しているのだが、それはピエタと重なり合っただけで宗教的象徴性がワイマール共和国時代に比べると高いといわざるを得ない。

このように、ワイマール共和国時代は無宗教に近く、第三帝国時代にはキリスト教化され、東ドイツ時代には再び無宗教化され、統一後の現在はキリスト教的シンボル性を持ちながら無宗教の施設である、というのがノイエ・ヴァッヒェがたどった軌跡である。

まとめにかえて～集団的記憶の形成と戦争記念碑・戦争墓

以上見てきたように、「無宗教」とされる追悼記念碑・施設といえども何らかの宗教的機能・象徴性を持たざるを得ないのが現実である。それはこれらが死者を追悼・記念するという行為の対象だからなのである。繰り返すが、この行為は宗教的性格を免れ得ない。

振り返って日本の状況を考えると、以上のようなすでにわれわれの知りうる諸外国の状況を適切に理解することなしに、靖国問題への「現実的」処方箋として、「無宗教」の記念碑・施設が追求されているように思われてならない。

この問題を考える時、われわれはある一つの出来事を想起すべきであろう。それは、天皇・皇后も出席して毎年八月一日に政府主催で「無宗教」で行われているはずの全国戦没者追悼式において、全戦没者を象徴する祭壇中央の柱にはかつては「全国戦没者之標柱」とだけあったものが、一九七五年から「全国戦没者之霊」と変わったという事実である。追悼を

捧げるに際しての「単なる目印」から「霊の宿るトーテム」への変身をわれわれはすでに一度経験しているのである。このことの意味をもう一度考えてみる必要があるだろう。

さらに「空の墓」という意味ではすでに靖国神社が「空の墓」であるが、靖国神社はセノタフになり得るだろうか？ 答えは否である。靖国神社は現に単立の宗教法人であり、建前上でも「無宗教」とはいえないからである。

現在の日本はこの点で二つの問題が指摘できよう。一つは、「無宗教」のセノタフは英国国教会による祭祀を受ける「無名戦士の墓」とワンセットで存在し機能しているにもかかわらず、そのことの意味をほとんど無視してセノタフの無宗教性という側面だけが採り上げられ「参照」されているという事実である。第二に「無宗教の追悼施設」が靖国問題の「現実的処方箋」という視点から提起されているという事実である。靖国神社そのものの存在や靖国信仰の在り方を正面から検討した結果出てきた議論ではないように思われる。筆者はこうした点を考慮しないで議論を進めた場合、結果的に第二の靖国神社を創り出すことにもつながりかねないのではないかと危惧している。本稿で見てきたように、どの記念碑・記念廟も時の権力によってその性格や誰を祀るかが常に左右されてきた歴史を持つ。日本においてこれからどの様な議論がなされ、どの様な施設が造られるのか、造られないのか予断を許さないが、結局それは時の権力も含めて現在のわれわれの歴史認識を鋭く反映したものにならざるを得ない。戦後の日本においては戦争の性格からその死の意味を問い質す議論と、それへの反発が積み重ねられてきた。実はこの点をつきつめて議論することが一番大切なのではないだろうか。あの戦争は一体何だったのか、そこにおける死の意味は何だったのか、が改めて問われなければならない。そうして初めて、その死者を記念し、慰霊し追悼するという行為そのものの意味が明らかになると考える。

現在の議論は、「どこの国にもそうした施設があるのだから、日本もそれにあった施設を造るべきだ」あるいは「死者を追悼することは平和を祈念することに他ならない」、また善意からにせよ「靖国問題の現実的解決にはこれしかない」ということをアプリアリに前提にしたものが多い。本当にそうなのだろうか、ということも含めてこれから議論が深められるべきであろう。

では、ここで述べてきたように、セノタフの「無宗教性」は単なるごまかしなのであろうか？ 一概にそうだとはいえないと考える。つまり、それがあつた状況下の政治的必要性から造られたものだったとしても、それを「無宗教」であると建前で言い切る「政治的英知」がセノタフを存在させている一側面であることも考えてみる必要があるだろう。しかし同時に、それでもセノタフには「栄光ある死者＝英霊」という碑文が刻まれ、英国国教会ロンドン司教の司会による礼拝、英国国歌斉唱が行われていることを忘れてはならない。

最後に、本稿でみてきたように、記念碑はその建設を通じて、その維持・管理を通じて、そしてそこでの儀式等を通じて、特定の政治的機能を果たしてきた。その最も顕著な例がイギリスではセノタフと「無名戦士の墓」、セントポール・カテドラルであり、フランスではパンテオン、エトワール凱旋門、廃兵院ドーム教会である。フランスにおいて、特に大規模な記念施設が必要とされたのは、フランス革命以後、急速に国民国家が形成されていったからである。記念碑は、国民国家形成へ人々を動員する上で大きな役割を果たし、それが集団的記憶として国民国家へのアイデンティティを深めたのである。本稿で明らかにしたように、記念碑はその時々の政治体制が何らかの政治的必要性のために手段として作り上げたものであつたが、それを媒介としてでき上がった集団的記憶は時を経て再生産され、また時に変容していく。その在り方を跡づける作業が今日を生きるわれわれにとって重要な課題であるとする。

〔註〕

- (1) その配布資料1が『諸外国の主要な戦没者追悼施設について』である。筆者はweb上から参照した。
- (2) G. モッセ『英霊』, 99~100頁
- (3) 同前, 100頁。なお、「無名戦士」の選び方は、目隠しをされた将校が指さして行った。
- (4) 同前
- (5) 正確には次のような次第であった。すなわち、ネルソンの葬儀は国葬であったので、喪主は遺族で爵位相続者の兄ではなく、最長老の海軍元帥が務めた。この時、王子たちも喪主として名乗りを挙げていたのである。国王はこれを禁じ、王子たちは王族としてではなく連合王国の爵位貴族として葬儀に参列したのである。以上、中村武司「ナポレオン戦争の記憶とセント・ポール大聖堂」、『パブリック・ヒストリー』第1巻, 69~70頁参照
- (6) 前掲『英霊』, 100頁
- (7) Geoff Dyer “THE MISSING OF THE SOMME” PHOENIX, 1994, 19頁
- (8) 同前, そしてオリジナルのセノタフの大部分は第二次世界大戦のドイツ軍の爆撃で破壊されるまで、ロンドン郊外の帝国戦争博物館に保管されていた。
- (9) Dyer前掲書, 22頁
- (10) 前掲書, 20頁
- (11) 同前, 23~24頁, なお、『荒地』の訳文は、岩波文庫版の岩崎宗治訳を参照した。拙訳で「ウェストミンスター橋」となっている所を岩崎訳では「ロンドン・ブリッジ」となっている。両者は別物で、セノタフが建っているホワイトホールとウェストミンスター・アビーの位置関係から考えてロンドン・ブリッジは相当遠い。Dyerの本ではどうして「ウェストミンスター橋」となっているかは不明。なお、拙訳で「死者がこんなにたくさん甦ったなんて」という部分は、岩崎訳では「死に神にやられた人がこんなにもたくさんいたなんて」となっているが、Dyerの文脈は兵士の行進が死者の甦りととらえているのであえて拙訳のままとした。
- (12) 同前, 25頁
- (13) 前掲『諸外国の主要な戦没者追悼施設について』, 7頁
- (14) Parliamentary Debates House of Commons, Vol.118, 1948p, 29 July 1919, 以下PDHCと略記, なお、質問と答弁はすべてoral, また下線は引用者
- (15) 同前
- (16) 同前2112P, 30 July 1919
- (17) 同前
- (18) PDHC, Vol. 119, 41p, 4 August 1919

- (19) 同前
- (20) 前掲『英霊』103頁
- (21) 前掲書, 100頁
- (22) 本稿執筆に当たってはパンテオンの英語版ガイドブックJean-Francois Decraene “A BIOGRAPHICAL GUIDE OF THE PANTHEON” および “THE PANTHEON TEMPLE of NATION” を参照した。また、パンテオンの歴史については同僚の仏文学者佐野栄一氏の示唆によるところが大きい。記して感謝するしだいである。また、近年パンテオンについては長井伸仁『歴史がつくった偉人たち—近代フランスとパンテオン』が出版された。これについても参照した。長井氏はフランス革命に先立つ啓蒙主義の広がり英雄ではない「偉人」という観念を革命期にもたらしたと指摘している。
- (23) また、栄誉殿堂という必ずしも聞き慣れない言葉の卑近な例としては「野球殿堂」を想起すればよい。これは野球という分野での「偉人」たちを記念・顕彰する施設である。
- (24) 本稿ではパンテオンへの埋葬・合祀＝パンテオン葬をいくぶん歴史的・文化的位相のズレはあるもののあえて合祀と表現した。
- (25) 前掲長井『歴史がつくった偉人たち 近代フランスとパンテオン』62頁
- (26) 前掲長井, 63頁参照
- (27) 長井氏はマラの遺体から心臓が抜き取られ崇敬の対象になっていた事実を指摘して「カトリシズムを特徴づける要素の一つ、聖遺物崇敬によく似ている」と述べている。前掲長井, 66頁参照
- (28) 以上、長井前掲書, 85頁参照, なお長井氏は両者を「ともに継承しようとしていた」と表現されている。
- (29) パンテオンの設計者、復古王政はパンテオンを否定し聖堂に戻しているなのでこの場合は「埋葬」とするのが正しいであろう。
- (30) 現在のパンテオン内の壁画は第三共和制初期の王統派が主導権を握っていた時期に描かれたもので、「今日パンテオンを訪れる人は、その壁画が王政的・キリスト教的モチーフに貫かれていることに驚くであろう。」と言う長井氏の指摘はその通りである。この点については、長井前掲書100～103頁参照
- (31) ワルハラへの合祀はバイエルン州政府の決定による。
- (32) セント・ポール・カテドラルのパンテオンの性格については前掲中村「ナポレオン戦争の記憶とセント・ポール大聖堂」, 『パブリック・ヒストリー』第1巻参照
- (33) 長井前掲書, 148～150頁参照
- (34) ジャン・チュラール(杉本淑彦訳)「遺骸の帰還 ナポレオン伝説とアンヴァリッド」, 122頁, ビエール・ノラ編(谷川稔監訳『記憶の場: フランス国民意識の

文化=社会史 第三巻』所収

- (35) 「アンヴァリッドがいつそうふさわしい理由は、わが国軍隊の老兵たちや、過去と未来の古参兵たち、さらには元帥一人からなる輝かしい近衛隊がナポレオンを護衛することになるからである。おそらくわれわれにとってのナポレオンは、名隊長ではなく、君主であり立法者であろう。しかしわれわれは、国王として崇拜すればするほど、その墓が単独でないことを望むのである。わが国軍隊の隊列のなかからつねに補充されつつ継承されていくこの軍人集団、そしてマレンゴとアウステルリッツの兵士の足跡を輝かしくもたどるだろう勇敢な傷痕軍人たち。このような将兵以外に、どのような近衛隊がナポレオンに対して望めようか」ークロゼル元帥の発言。同前
- (36) モッセ前掲書, 102頁
- (37) 前掲『諸外国の主要な戦没者追悼施設について』参照